

提示された条件をクリアしないと出られない部屋——都市伝説として話には聞いていたけど、まさか自分の身に起こるなんて思ってもみなかった。

壁に窓が一つもない、広めの部屋。ドアは一つで、その上には『未達成』と表示されている液晶ディスプレイがあった。

私と一緒にここへ来てしまった上司の涼さんが、唯一の出口らしきドアへと歩いていく。私はその大きな背中を、ただ呆然と見守ることしか出来ない。

（どうしてこんなことに……？）

涼さんと営業を終えて、相手方の地下駐車場から自社用車に乗り込んだはずだった。それなのに——目の前には、ラブホテルでしか見たことのない、大きなベッド。

「開かないなあ。噂には聞いてたけど、本当に存在してたんだ」

ドアノブをガチャガチャとしていた涼さんが、すぐ横にあったベッドに腰掛ける。さっきから全く慌てていなければ、警戒もしていない。動揺しているのは私だけ。さすが営業課のエースだ。心構えが違いうらしい。

「それにしても……『アクメ』ねえ」

あまりに露骨な言葉を口にする涼さんに、頬が赤くなった。

なるべく見ないようにしていた、ベッドの上。そこには、デカデカと『アクメしないと出られない部屋』と書かれた垂れ幕が掛かっている。

つまり——涼さんとエッチなことをしなければ、ドアは開かない。

「はあ、まいったな……」

ため息をつく涼さんに息が詰まる。モデルみたいに長身で華やかな顔立ちの涼さんは、人当たりの良さもピカイチだから男女問わず人気が高い。対して私は、営業成績も人並みな新卒のちんちくりん。涼さんとは名字が一緒に、名前呼びを許されているだけに過ぎない。

でも、『加賀原』なんて珍しい名字、自分以外で見たのはお互い初めて。

その親近感からか、涼さんにはすごく良くしてもらっている。

だからといって、エッチができるかは別。それは分かる。でも……ため息をつくほど嫌みたい。

その事実には涙目になっていると、困り顔の涼さんと目が合った。

「やっぱり芽衣ちゃんは困るよね」

「……え？ 私、ですか？」

「うん。彼氏に悪いし」

涼さんの言葉に、パチパチと目を瞬かせる。確かに入社した時、彼氏はいた。けれどゴールデンウィーク頃に別れていたから、かれこれ半年はフリーの身だ。

彼氏の話をしたのは、新入社員歓迎会の時だけ。涼さんに直接話したわけでもないのに、覚えてくれていたなんて……嬉しいような気恥ずかしい

ような気持ちで、私は慌てて口を開いた。

「彼氏とは別れてます」

「え？ そうなの？」

今度は涼さんが目を見開く。滅多に見ない表情に、申し訳なさが募った。
「言わないままで、ごめんなさい。特に話題に上がることもなかったので、機会がなく……」

「いや、うん。こっちも今の時代、なかなか聞ける立場じゃなくて……気を悪くさせちゃったらごめんね」

「いえ、全然。もう過去のことですし」

「過去、か……中校生の頃から付き合ってるって聞いてたから、てっきり結婚、とかするのかと……」

言葉を濁されて苦笑が漏れる。確かに彼とは八年付き合っていた。でも結局それは、ずっと地元で一緒だったから。就職して離れ離れになれば、

壊れる絆だった。

「ゴールデンウィークに会いに行ったら、他の女の子と、その……浮気してたといひますか」

一人暮らしの彼の部屋で浮気エッチを見ました、とは言えなかったけど、涼さんはすぐに察してくれた。眉間に皺を寄せる顔も、かつこいひ。

「最低だな……そういえば、元彼は都心に出たんだけっけ？　浮かれてやらかしちやったのかな」

「そうみたいです。お盆にはやり直そうとか言ってきたので」

「……は？」

慰めモードの涼さんから、聞いたことのないような低い声が聞こえて、私は思ひ切り手を左右に振った。

「もちろん断りましたよ。なんかもう、気持ち悪いというか……拒否感が強かったのひ」

「うん、それは仕方ないことだよ。相手が誠実じゃないよね」

力強く頷かれてホッとする。地元の友だちからは「付き合いが長かったんだから、復縁しないなんてもったいない」なんて言われた。「薄情だ」と怒られたりもしたっけ。

もし涼さんに同じように思われたら、めっちゃくちやへこむところだった。「そっかあ、ゴールデンウィーク……芽衣ちゃんがそんな目に合ってたなら、慰めたかったな」

本気で残念がっている涼さんの声に、ドキッと心臓が跳ねた。涼さんのこういう優しいところが大好きだ。

憧れから報われない恋になりそうなのを必死で抑えてるのに、何かと氣にかけてくれるから気持ちが大きくなってしまっている。

「芽衣ちゃんは……まだ元彼のこと、忘れられない？」

真剣な顔で見つめてきた涼さんは、相変わず私を氣遣ってくれている

ようだ。だから慌てて首を振った。

「いえ。付き合いが長すぎて、正直もう恋心はなかったんです」

「そっか、うん……なら、大丈夫だね」

「はい！」

「じゃあ、こっちおいで」

「……はい？」

「俺と『アクメ』するの、大丈夫だよね？」

両手を広げている涼さんは満面の笑みだ。どうやら私とそういうことをするのが嫌で、ため息をついていたわけではなかったみたい。そのことに安堵したけど、はたと動きを止める。

それはつまり、涼さんところで――。

「……やっぱりアラサーおじさんの俺じゃ、芽衣ちゃんが嫌だよね？」

「えっ、そんなこと、全然ないです！　ただ、あの……」

「うん？」

「その……身体、洗ってないし……」

あまりの恥ずかしさに、全身が熱くなった。ここにはシャワーがない。一日働いた身体を、憧れの涼さんに触ってもらうのは堪える。

とても切実な悩みなのに、涼さんは「なんだ、そんなことか」と顔を綻ばせた。

「俺も朝にシャワーを浴びたきりだよ。汚いと思う？」

「え……涼さんは汚くないです」

「ありがとう。なら、俺も芽衣ちゃんのことを汚いなんて思わないって、分かってくれるかな？」

「……はい」

爽やかな笑顔で同意を求められてつい頷くと、涼さんが手を差し伸べてきた。

もう腹をくくるしか、ない。ここで躊躇していたら、涼さんに迷惑をかけてしまう。

「さあ、おいで」

「う……はい」

涼さんの甘い声に、とうとう手を取ってしまった。グイッと引つ張られてバランスを崩した私を、見た目以上に逞しい身体が抱き止める。

心地よいベッドのスプリングに揺れるなか、見上げれば憧れの人の顔があるなんて……まるで——。

「ああ、まるで夢みたいだ」

（ん？ あれ？ 私の心の声が、涼さんの口から出てきちゃった？）

驚きで固まっていたら、上からキラキラと輝いている双眸が近づいてくる。避ける間もなく、ぷにゅ♡と唇が合わった。びくつと竦んだ私の身体のことなんてお構いなしに、涼さんは何度も唇を啄んでくる。

「っ♡んむう♡」

息が上がってきたタイミングでベッドに倒されて、緩んだ口にぬるっとした熱がねじ込まれた。薄い唇からは考えられないほど厚い舌は、逃げようと縮こまっている私の舌をすくい上げる。

「ん、あっ♡ん♡ん♡」

にゆるにゆる♡と舌に絡みついてきた熱は、涼さんの意思で動いている——そう思い至った途端、じん♡と下腹が疼いた。

「っあう♡りよ、涼さん……っ♡」

「んー？ 上顎のところ、きもちい？ 口の中もちっちゃくて可愛い……もつと舌でなでなでしようか」

「んっ、待って、くださ、っ……んんっ♡」

口腔の気持ちいいところを擦られるだけでもたまらないのに、優しくうなじや耳たぶを撫でていた大きな手が胸元に触れた。服の上から絶妙な力

加減で揉まれたら、身体が勝手に悶えてしまう。

「ん……芽衣ちゃんは感じやすいのかな？　ちょっと触っただけで、えっちに身体が揺れちゃってるよ？」

「そ、そんなこと……ん♡ない、です……っ♡」

「そう？　じゃあ直接もっとならせて？」

「えっ、そんな、んっ♡んんっ♡」

驚きの声を挙げた口をまた優しく塞がれ、スーツもワイシャツもボタンが次々と外されていく。ブラのホックさえ易々と外した指が、そのまま前まで回ってきて――。

「っふ♡ふうっ♡」

服越しとは違って直接おっぱいを大きな手に包みこまれると、恥ずかしい声が鼻から抜け出た。

「ん……ふわふわのおっぱいも敏感なんだね。身体びくびくさせちゃって、

かーわい……もっと気持ちよくなろうね？」

「んああっ♡涼さ、っ♡そこ、っあ♡あうっ♡」

おっぱい全体をもみもみ♡しながら、親指で乳首をくにくに♡と転がされて悶える。見たことのないほど雄の顔をした涼さんの視線を感じるだけで、身体が勝手に熱を帯びてきた。

「乳首ちよっといじっただけで、ビンビンになってるよ？ 芽衣ちゃんがこんなえっちな身体だったなんて、知らなかったなあ」

さらに、卑猥な言葉を涼さんから投げかけられているという、倒錯的なシチュエーションが、妙な興奮を生んでいる。長年付き合った元彼とは、一度もこんな快感を覚えたことはない。

私が戸惑っている間に、今度は涼さんの右腕が下の方へと降りていった。躊躇なくスカートをたくし上げられ息を呑む。

「ふっ……すご。ストッキング越しでも濡れてるのがよく分かる」

「あ……っ♡み、見ないでくださ、ああッ♡」

「ほら、ここ……ッんって可愛く勃ってるよ？」

「やっ♡だめ、ですっ♡触っちゃ、……あうっ♡」

「ちっちゃいのに敏感で可愛いクリちゃんだね。よーしよし……」

「んあああっ♡りよ、うさっ、ッああ♡」

——くちゅッ♡くちゅりッ♡

「ん？ もうクリちゃんまでびしょびしょなの？」

ちよつと驚いたような涼さんの声に、かあつと顔に熱が集まる。

「……ッ。私も、こんなの、初めてで……なんで分かりませ、ッああ♡

ま、ってください、っ……あっ♡あっ♡」

「そうやって煽らないの。もつとぐちゃぐちゃにしたくなる……」

——くちゅくちゅくちゅくちゅッ♡

「あああ……ッ♡はや、い……っん♡あっ♡ああッ♡」

指の腹で小刻みにクリを揺すられ腰が浮いた。室内に響くいやらしい音も性感を刺激する。

「りよ、うさん、っ♡んあッ♡あッ♡イっちゃ、っ……」

「もうイっちゃう？ 直接触ってないのに？ もうちょつと我慢してほしいな。もつと芽衣ちゃんに、触れていたいから……」

「ん、あっ♡みみ、ダメですっ♡ッ♡んあ~~~~ッ♡」

耳元で熱い吐息を零すだけでは飽き足らず、涼さんは大きな口でパクリと耳を丸ごと食べてしまった。さっき私の口内を好き勝手していた舌でそのままねぶられ、ゾクゾク♡と湧き上がる快感から逃れるために首を振る。けれど離してくれるどころか、その動きは一層激しくなるばかり。

代わりにクリをいじっていた指は、焦らすように周りをくるくると優しく撫でているだけ。それがもどかしくて、勝手に腰が動いてしまう。

「ふ……芽衣ちゃん、腰をへこへこさせてどうしたの？」

「っんんあ~~~~ッ♡ そこで、っ喋らないでください」

「ごめんごめん。どこもかしこも敏感で困っちゃうね？」

「あっ♡ あっ♡ あ……っそこ♡ おまんこカリカリ♡ だめ、っですッ♡」

「クリちゃんびんびんだよ？ どうなってるか、見せて……」

「っん……涼さん、っ……」

「わ、パンツに愛液がべったりで、糸引いちやってるね？」

「っ、み、見ないでください」

「どうして？ えっちで最高だよ。でも、履いて帰れるかな……うーん。

まあ、直帰だから履かないでもいいよね？ ノーパンで送ってあげる」

パンツをストッキングごと脚から引き抜きながら、涼さんが笑顔で恐ろしいことを言ってきた。

自社用車でノーパン帰宅はごめんこうむりたい。でも、もう一度履ける状態ではないことを、私自身がよく分かっている。

解決策が思い浮かばず泣きそうになっている内に、スカートまで抜き取られてしまった。足の間に大きな身体で陣取られ、羞恥で身体が火照る。涼さんがスーツのままだということも、いけないことをされている感を助長していた。でも、当然「脱いでください」なんて言えるわけがない。

膝に置かれた大きな手が、躊躇なく脚を左右に広げる。涼さんの視線がおまんこに注がれているのを見てられなくて、私は目を強く瞑った。

「ひくひくしちゃって、えっちななあ。クリちゃんが触って♡ って皮から顔出して誘ってきてるよ?」

「ん、っひ♡ あっ♡ 涼、さん……っ♡」

「直接触った方が気持ちいいみたいだね? おまんこから愛液がいつぱい出てきたよ」

「っあぁッ♡ それ、だめっ、……あぁッ♡」

「芽衣ちゃんは、どうやって触られるのが好き? 押すのはどう?」

「ひあっ♡ つよい、っあッ♡」

「擦るのはさっきしたもんね？ 両方してみよっか」

——くにゆりッ♡ ぐにゆぐにゆッ♡♡

「んああ~~~~ッ♡ りようさ、んどっ♡ イく♡ イっちやいま、っだんッ♡」

「もうちょつと我慢して？ えっちな芽衣ちゃんを、もつと見てたいから……」

「あっ♡ あッ♡ むり、っむりですうッ♡」

「そんなに気持ちいい？ クリちゃんの根元、ぐりぐりされるの」

「んっ♡ ぶッ♡ きもちいれすうッ♡」

「ははっ、敏感で素直な芽衣ちゃん、かわいすぎる……イきたいねえ？」

「はいっ♡ イき、っ♡ ｲきたいれすッ♡」

「じゃあ、俺の目を見ながら『クリちゃんぽでアクメしたいからいじめて』

っ
てお願いして？」

イクのを我慢する地獄の耐久から一転、全部の刺激がいきなり止まった。ぼんやりと瞼を開ければ、舌なめずりしながら瞳をギラつかせている涼さんと視線が合う。

「イって楽になりたいなら、言えるよね？」

色香を纏う涼さんは、私の知らない人みたい。でも、そのことに心ときめいてしまう。エッチの時の涼さんって、こんなイジワルなんだ……。

「めーいちゃん、お返事は？」

「っひあああっ♡ きゅうにっ♡ されたら……、あ♡ あっ♡ イくうッ♡」

「だーめ。ほら、言ってごらん？」

「っあ……そん、な……」

またイきそうなのを寸止めされて腰が空振る。イクのを我慢するのと同じくらい、イクのを取り上げられるのが辛い。腰がへこへこ♡と動いて

いるところに、涼さんがイかないくらいの刺激でクリを撫でてきた。

「あっ♡ ああ~~~~♡♡♡」

「んー？ 甘イキしちゃったかな？」

「りようしゃん♡ は、ぐっ♡ イ、イきたいれすう♡」

「ふ……どこで？」

「ん♡♡ ぐ♡♡ く、くりちゃんで♡」

「クリちんぽだよ？ アクメしたいんだよね？」

「はう♡♡ ぐああっ♡♡ クリ、ちんぽ♡♡ アクメさせてくらしやいい♡♡
りよおしゃんの♡♡ ゆびで、え♡♡ いじめてくらはいい♡♡」

「はー……えろかわい……いいこだね。ほら、もうアクメしていいよ？」

——ぐりゅぐりゅぐりゅぐりゅ~~~~♡♡♡

「お♡♡♡ あああ~~~~♡♡♡」

(すごい♡♡♡ すごいのお♡♡♡ かちかちになったクリちゃん♡♡♡ 押し潰し

ながらぐりぐりされてるっ♡我慢してたのが、上がってくるうゝゝゝッ♡♡)

「腰へこしちゃって、たまらないなあ……ほーら、いくいくだよ？」

「あ♡ あっ♡ あ、ッ りよ、しゃんっ♡ いく、いきましゅうッ♡ アクメしちゃうゝゝゝッ!!♡♡」

——びくびくッ♡ びくんッ♡♡

焦らされていた分、ものすごい快感が身体の中をかけ抜けた。余韻が抜けなくて、ひくひく♡と全身が痙攣する。

「クリちゃん、完勃ちして剥けちんぽみたいになってる……えっちだなあ」

「ひっ♡ まだ、さわらないれ、くだしい♡」

「んー……でも、まだアクメしてないみたいだね」

「……え？」

「ほら、ドアの上。まだ『未達成』のままだよ」

涼さんに上体を起こされて、呆然としながら指差された所を見る。確かに、表示は変わっていない。けれど、今までの人生一と言っているほど盛大にイった自覚がある。

「もっと強くないとダメだったかな……ここまでクリちゃんがぷつくりしたら、しっかりアクメできるよ、きつと」

「えっ……ちよつと待ってくださ、っいッ♡」

「ぬるぬる滑っちゃって、摘めないな……」

「おッ♡ 涼さ、っん♡ やっ♡ イったばっかのクリちゃん、っ♡ 弄らないでくださッ、あっ♡」

「うん、でもちゃんとイってない判定だから、頑張ろ？」

「あッ♡ むりいッ♡ むりですっ♡」

「んー……摘みにくいから、口でアクメさせるね？」

グイッと膝裏を持ち上げられたと同時に、涼さんの吐息がクリに吹きか

かる。それだけでイってしまいそうなほど敏感になっているのに、そこが生暖かいもので覆われて――。

「えッ♡ あっ♡ うそ……っ♡」

「ん……えっちな味、おいひ」

「そんなッ、んあ♡ そんなトコ、きたなっひあッ♡ あんッ♡」

相変わらず好き勝手に暴れる舌が、クリのてっぺんをちろちろお♡と
もてあそぶ。そうかと思えば皮の境目をくるくる♡と舐められて、過ぎ
た快感に腰が浮いた。

「びんびんに勃って、根元に皺寄ってるね？ えっち……んー……」

「んああッ♡ りょおしゃんっ♡ イくうッ♡ またッ♡ きもぢくてっ

♡ イきましゅッ♡」

「ちよっと吸っただけだよ？ もう少し我慢したら、ちゃんとアクメできるから」

——ぢゅッ♡ぢゅるッ♡ぢゅるるッ♡♡

「あぁ~~~~ッ♡らめッ♡イク♡イクッ♡アクメしゅるうッ!♡♡」

強くクリを吸い上げられ、瞼の裏に白光が飛んだ。勝手に跳ねる下腹を、涼さんの右手がグッと抑えるから逃げられない。

「んあぁッ♡♡オぁッ♡♡やらあぁッ♡♡ひぁ~~~~ッ!!♡♡」

いったのに、涼さんは止めるどころか窄めた口でクリを上下に扱いた。更にその先端を高速でピンピン♡と舌で弾いてくるから、声も出さずにいき続ける。

身体が快感でおののき、意識が飛びかけたところで涼さんが口を離れた。

「ん……これだけ念入りにすれば、アクメできたと思うんだけど……」

びく♡びく♡と震えが止まらない身体を、涼さんがあやすように撫でてくるけど逆効果だ。それだけで悶えてしまうほど敏感になつてゐるのに「……あれ」と不穏な声が降ってくる。

「芽衣ちゃん、まだダメみたいだよ」

まるで死刑宣告だ。すでに身体はいきすぎてクタクタで、このまま寝てしまいうまくないのに……。

「りよ、涼さあん……。私、ホントにイッてて……。今までにないくらい、いっぱい気持ちよくて……」

「ははっ、それは嬉しいな。でもアクメしてないって判定だし……。ん？もしかして……」

「……涼さん？ 謎が解けたんですか？」

「そうだね……。もしかしたら、おまんこでアクメしないといけないのかも」
「……おま……。え？」

真面目な顔の涼さんが、また下肢に手を伸ばしてくる。嫌な予感しかなくて後退ったのに、大きな体軀からは逃げられなかった。

「りよりよ涼さん……。休ませてください……。何事も根を詰めたらダメ

だって、教えてくれましたよね……?」

「うん、その通りだよ。でもさ……決める時は一気に畳み掛けないと上手くいかなくなるって、教えたよね?」

——にゅぷぷぷ……っ♡

「あうッ♡」

「おまんこの中、ずいぶんと狭いね……元彼と別れて、ご無沙汰だったからかな?」

「んぐああっ♡ ひんッ♡ 挿入って……ッ♡」

「すごいうねってる……芽衣ちゃんは、おまんこも敏感でえっちなんだね?」

「あっ♡ ぐっ♡ ゆびっ♡ 回さないでくださいっ♡」

「だーめ。ちゃんと気持ちいいとこ探さないと、アクメできないよ? あ

……ここかな?」

「ひいッ♡ えッ♡ なっ……にッ♡」

「芽衣ちゃんのGスポット、浅めのとこにあったね」

「あッ♡ ああッ♡ そこ♡ そこ、だめですッ♡ ~~~ッお♡」

「ちよっとなでなでしたら低い声出ちゃうの？ 感度よくて、可愛い……
よーしよし……」

「らめえッ♡ あ~~~~っ♡」

おまんこのざらざらしたところを上を押しながら擦られると、未知の快感が全身に広がる。腹奥が熱く疼きだして、私は腰を捻った。でも一度抜けた指が、本数を増やして再度おまんこを無遠慮に犯してくる。

「やあッ♡ なでなで♡ だつめ……ッ♡ あっあッ♡ なに、そこおッ♡」

「ん？ Gスポット、触られたことない？ 元彼は節穴だねえ」

「ああ~~~~ッ♡ きもちいい♡ きもち、よすぎて……っ♡ おかしくにやるッ♡」

「愛液がどばどば出てくるよ。そんなに指を締め付けて……もうすぐイ
く?」

「なんッ♡くる……ッ♡なんか、ぎちゃうッ♡」

（勝手におしり♡上がつちゃうッ♡おまんこの中の指を追ってるみ
たいで、恥ずかしい……♡でも止まらないよおッ♡）

「えび反りなんてえっちなポーズしちゃって……可愛いから、いっぱいな
でなですね?」

「あ、っあ、あ♡っイ……ッ♡イクイクイクッ♡」

「うん……芽衣ちゃんの初めてのGスポイキ、見せて?」

——ぐちゅッ♡ぐちゅぐちゅちゅッ♡♡

「あ……ッ♡ああ……ッ!♡……ッッ!!♡♡」

目の奥で火花が弾けるのと同時に、大げさなほど肢体がびくついた。勝
手に股が開いて、涼さんに見せつけているような格好になってしまう。